

## 「生きる日々～障害の子と父の断章～」を読んで

大学時代に出会い、今も在宅で重度の障害のあるお子さんを養育している父親と、先日会った折、我々が出会った頃の話になった。

その話の中で、障害児の福祉施策が遅々として整備されなかった当時、「障害児の親たちがあんなに声をあげても社会は耳を貸さなかったのに、水上勉の『拝啓池田総理大臣殿（中央公論、6月号、1963.）』が出て、総理大臣に代わり官房長官が「拝復水上勉様（同、7月号.）」を返信し、国もその後次第に障害児問題に取り組むようになったが、やはり水上勉という有名人の声だったからか？」と問われた。

その時はそれなりに意見交換したが、ゆっくり読もうと購入しておいた水上勉の「生きる日々～障害の子と父の断章～」を思い出し、やっと読み終えた。

小説「雁の寺」、「飢餓海峡」、「筑前竹人形」等の作家の水上勉は、一方で脊椎断裂症の子ども父親でもあり、我が子を含め重度の障害のある子どもたちの支援が乏しいことを書簡「拝啓池田総理大臣殿」で社会福祉の遅れを告発した。

その後も障害児・者問題関係の発言をし続けたことでも有名である。

この本は、色んな雑誌等に掲載されたその時々の上水勉が我が子のことにつれた随想等を、出版社の「心身障害者問題への真摯な取り組み方と、出版への情熱から編集された」ものである。

それだけに、水上勉自身、「あとがき」の中で「この書は、次女直子が誕生してから、私が障害児問題、つまり、直子を通して、世の中を考えるようになった心の遍歴といえます。」、また、「一作家が、障害児とともに、どんな苦しみを経て生きてきたかの、見本といえましょう。」と記している。

確かに、障害児の親の書はあまたあるが、それらは過去を振り返っての書が多く、また、母親によるものが圧倒的に多い。

そうした側面からみて、この本（もちろん、書簡「拝啓池田総理大臣殿」も収録されている）は、その時々につかれた父親としての心境が綴られた心の暦であった。

障害児の処遇の歴史に関心ある方、また、障害児の父親としての心境歴に関心ある方にお勧めします。